We 25R

No.265　03/10/08

進路・受容理論

22日（火）８・９時限目に予定されている「進路懇談会」に向けて、どの学部・学科の懇談会に参加したいのか事前調査を行ったが、25Rの諸君の結果を示してみよう。

○文学部・文学系	2
○文学部・心理系	6
○社会学部	1
○外国語学部	2
○教育学部	1
○芸術学部	1
○法学部	3
○経済学部・国際関係学部	5
○経営学部・商学部	2
○理学部・化学系	1
○理学部・物理系	5
○理学部（情報）工学部（経営工学）	1
○工学部	5
○農学部	1
○医学部	2
○薬学部	2

例えば、経済学部なのか経営学部・商学部なのかまだ迷っている人は、友だちと相談した上で、経済学部に出る人と経営・商学部に出る人を分担し、あとでそれぞれ内容を報告しあってみてはどうかと提案した。だから、必ずしも第一希望の学部・学科のものに参加しているわけではないという人もいるかも知れないが、単純に計算すると、25Rは、文系（＝文学部から経営学部・商学部まで）は２３名、理系（理学部から薬学部まで）は１７名ということになる。ここ数年の傾向としては、理系希望の諸君が多いので（例えば、今年の３年生の科目選択の時には、文系が約150名、理系が約170名であった）、ちょっと特色があるのかも知れない。

＊

昨日の通信で、実力テストの第一問の出典がＨ・Ｒ・ヤウスの『挑発としての文学史』（轡田収訳、岩波書店、昭51）だと紹介したら、早速●●くんが「あの本は、受容理論の本ですよね？」といつもの調子で（笑）話しかけてきた。こういうところは●●くんのなかなか立派なところである（遅刻と授業中の意識の旅立ちが直ればさらによいが…）。

受容理論というのは、現代の文学批評・文学研究の基本をなす重要な考え方なのだが、ごく簡単にいうと、作者よりも読者（受容する人）を重視する考え方である。

例えば現代文の授業で「作品の主題」といったことを考える際、ちょっと前までは「主題＝作者のイイタイコト」だったわけだが、最近は「主題＝作品から読み取れること」というのが授業をする我々の基本的なスタンスである。というのも、作品は確かに作者が創造するものではあるのだが、読者がそれを読まない限り、作品はその価値を発揮しない、つまり作者よりも「読者」なのである。例えば、君たちだって小説を書けるわけだが、君たちが小説家と呼ばれるためには、一定の読者がいなければならないのは明白だろう。

このような考え方の基本となったのが『挑発としての文学史』であり、Ｗ・イーザーの『行為としての読書』（岩波書店、昭和57）である。現在、どちらも入手するのが難しい（古本かつ高価）本ではあるが、興味のある人はどうぞ（ただし内容は特難）。